

求める会ニューズ No. 990

食料環境セミナー報告

7月28日(水) 10:30~12:00

「食べるとはどういうことか」

京都大学人文科学研究所准教授

藤原 辰史さん

人間は食べている物で出来ています。

「食べる」行為は、人間だけが社会的な関係を持っていると言えます。人間は性行為は隠しますが、食べることはオープンにします。ゴリラは性行為はオープンにしますが食べることは隠します。

今までに食べたものでおいしかった物はいろいろあるでしょう。おにぎり、味噌汁、きゅうり、蜂の子の佃煮などなど、会場からはいろいろ出てきましたが、「食べる」とは体内の微生物を育て、常在菌との協同作業でガスを発生させるものと言えます。食べるという行為は(鉱物である塩以外は)生き物の死骸を食べることであり、「食べる」ことで人間関係を作っていると言えます。ペットが餌を食べるのとは違って人間の「食べる」という行為は文化です。

人間は生態系を体内に持っていると言えます。人間は火を扱うことによって、食べた物(殺した生命)を栄養素とし脳を発達させます。歯を使い刃物を利用して食べたものを大腸に送り、分解し、発酵させます。分解とはあるものがある属性から別の属性に変化する現象です。モーターの高速回転に頼る燃料消費的運動ではなく、膨大な微生物の力を借りた分解運動=エネルギー革命が重要です。

地域によって食材は違っても人間の消化器官であるチューブを通過する生き物たちは土壌、気象、植物、動物とともに文化の根

源と言えます。

20世紀になって人口が増えました。トラクターの出現や品種改良によって、食べ物と公害の問題が起こってきました。化学肥料や農薬による世界的な土壌劣化危機状態です。これは大規模農業へ警告です。バナナ農園を開いたり熱帯雨林を開発するためには、そこの住民を追い払い、熱帯雨林にいる毒蛇や毒蜘蛛、サソリなどを殺すために火を放ち大規模に焼き払います。

今や徹底的な小農を選ぶこと以外に生き残る道はないと言えます。小規模農業が主である日本は追い風が吹いています。国連総会で決議された「小農の権利宣言」

(2018)に日本政府は棄権票を投じました。ですが、エネルギー源として生ゴミを利用し、小規模の有機農業、消費者との提携運動を進めていくことこそが重要なことだと考えます。

縁食(えんしょく)という考え方があります。食を過剰な商品化から解放し、住、水、空気などあらゆる必需品から商品の枠組みを外します。人間が居やすい場所だけを設計し、家族以外の人たちとも穏やかに、ゆるくつながって食べる場を作ります。孤食や個食と共食のあいだと言えます。代表的なものに子ども食堂がありますが、そこでは緊張を解き副交感神経を働かせ、食を共にしながら家族以外の人とも世代をまたがって多様な交流が生まれます。

食べることは単なる栄養補給ではありません。食べることは人間としての文化的行為としてあるのです。

(武庫之荘 G 西 咸子)

9月のカレンダー



9月8日（水）部会
9月20日（火）共同購入申込締切日
9月21日（水）自動引き落とし日

9月の全体会はありません

コロナウィルスの感染拡大で、兵庫県にも緊急事態宣言が発令されたため、9月の全体会は中止します。

端境期にともなう配送変更のお知らせ

生産者から、秋の端境期の連絡がありました。今年は日本海を通過した台風の風で野菜が倒れ、日照不足で気温が上がらず、さらに長雨のため野菜が育たないとのこと。そのため、野菜は隔週配送、それに従い、米、卵、その他の配送も変更となります。

詳しくは「今月の取扱品」掲載の配送カレンダーで確認してください。

※9月第二週から、10月第一週まで、隔週配送。

※いつまでという予定が立てられません。変更があり次第、連絡いたします。

「西日本アグロエコロジー協会」記念講演

8月21日（土）、兵庫県有機農業研究会（研究部）から名称変更した上記協会の臨時総会があり、そのあと14時過ぎから約2時間、記念講演がありました。緊急事態宣言下、すべてオンラインでの参加となりました。講師は3人。以下はその要約（かなりの）です。

1. 「アグロエコロジーとはなにか？」池上甲一氏（近畿大学名誉教授、協会共同代表）

科学、技術、農業の実践、作り手・食べ手・その間の流通システム全体まで含めた食農の権利の復権、それらが一体となった政治・社会運動である。しかし、「正解」があるわけではない。概念は共通してあるが、具体像は千差万別、自分たちで作っていくもの。ラテンアメリカで始まり、現在では英国、EUがこの理念を政策に反映させて来ている。「西日本アグロエコロジー協会」は日本で初めての動きで、「西日本」としたのは、東京中心ではない地方からの発信の意味を込めている。しかし、視野は日本各地、アジア、世界へと広げたい。

2. 「アグロエコロジーと有機農業」橋本慎司氏（市有研、協会理事長、共同代表）

有機農業は3段階の時代を経て来たといえる。①普及の時代 ②拡大の時代、そして今、③量から質の高い運動へ（3.0＝スリーポイントゼロという）。真に持続可能な包括的な在り方に向けて大々の転換を迫られている。ここでアグロエコロジーの理念に繋がる。

3. 「なぜ、いまアグロエコロジーなのか？」平賀緑氏（協会理事）

経済の面から考えるアグロエコロジーは、地球規模の危機、資本主義の行き詰まった危機を人類が生き延びるための運動。食の安心・安全などの域を超えたもの。山積する問題は、資本主義では、経済・食料システムとして真つ当に機能している、とする。しかし、経済とは本来「経世済民」であり、人間らしい生き方が出来るものでなければならない。

<注>経世済民＝けいせいさいみん。世を経（おさ）め、民を済（すく）うこと

【関連書籍】『アグロエコロジー入門』明石書店 2020年（池上甲一氏は日本語監修メンバーのひとり）、平賀緑著『食べものから学ぶ世界史』岩波ジュニア新書（鶴甲団地G 飛田みえ子）